巻頭言

研究室が10周年を迎えました。

私がこの間、一貫して説明してきたことは、「この大学を良い大学にしよう」ということです。私一人でこの大学の偏差値を上げることは無理ですが、研究室単位でなら、レベルを上げることは十分出来ます。

それは結局、全メンバーに研究に熱心に取り組んでもらうということに尽きます。個々人にとって、研究室経験は、他で得られない人生経験となります。研究経験、学会発表、論文発表は、当人の経験と実績になり、将来にわたる財産になります。もっと広い意味では、この大学の学生、卒業生、そしてこれからの入学者のために、この大学の評価を上げることにつながります。大学は個々人にとっては単なる通過点かもしれません。しかし、教員は現在の学生だけでなく、卒業生にも、将来の入学者に対しても責任があります。

良い研究結果を元に良い学会発表をすれば、本学および学生の評価が上がります。聴衆のなかに他大学の人も居ますし、恐らく将来の同僚や上司、後輩も居ます。研究成果がまとまって論文になると、予算も得られて研究教育環境が整います。これらは今後入学してくる学生のためでもあります。もっとも、これらは特別な事ではなく、どの理系大学でもやっていることです。

真に大事なのはこうした大局的な視点です。研究室のメンバーには、協力をお願いします。一緒に頑張りましょう。研究自体は勿論大事ですが、研究を通じて仕事のやり方を覚える、と考えると実り多いでしょう。将来良い社会人として活躍を祈ります。それから卒業生は、本学出身者の評判を上げるべく、そして勿論自分自身のために、日々の仕事に真摯に取り組んでください。幸いを祈ります。後輩の就職についても、どうぞ宜しく頼みます。

今号の「卒業生からのメッセージ」欄には、一期生の二人に近況を寄せてもらいました。

(2006年12月 持田 記)